

# UIFA JAP●N NEWSLETTER

## ■主な内容

### 海外交流の会

「国境をこえて—みかんぐみの設計作法と建築」

—マニュエル・タルディッツさんのお話—

### 連続企画 広がるレースワーク 2

「日本とブラジルの文化のかけらを編み込む1」マリア・アンジェリカ・ダ・シルバ

「関西国際交流セミナーを振り返って」寺尾信子

「<風の道>計画のその後と名古屋のまちづくり」向井 愛

「共生する内装」栗山礼子

「都市と農村の共生—北海道版」中井和子

この指とまれ

「<風の道>まちづくりと藤前干潟見学ツアー」

海外交流の会のお知らせ

セナさんの本を読む会

役員会報告

## ■海外交流の会

### 「国境をこえて—みかんぐみの設計作法と建築」

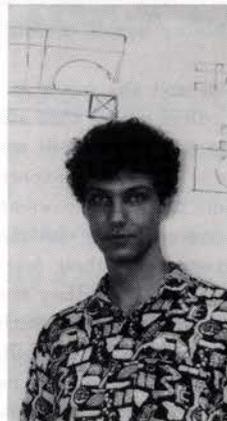
—マニュエル・タルディッツさんのお話—

7月31日に開かれた海外交流の会では、<みかんぐみ>のメンバーであるフランス人建築家マニュエル・タルディッツさんに、現在の活動についてスライドを交えてお話いただいた。<みかんぐみ>はNHK長野放送会館建築コンペの際に結成され、そこで最優秀賞を受賞、一躍注目を集めている新進気鋭の建築家集団である。

このユニークな名前の由来は、ご子息の幼稚園のクラス名で、何よりもわかりやすいこと、さらに みかんの構成—外側はひとつだが中はひとつひとつの房に分かれている—と、5人のメンバーから成る<みかんぐみ>の構成が同じ、という意味も含まれているとのことである。

NHK長野放送会館、八代の集会所、プエノスアイレスのコスタンティーン美術館コンペ案、などの作品についてお話いただいたが、設計のキーワードは場所性とコラボレーション。その言葉の向こう側にインターナショナルスタイルでもなければ地域主義でもない、新たな世界を構築するべく仕事をする姿があるように思われた。

タルディッツさんは、「現場で考えることが大切であり、場所性に建築は合わせなければならない。例えば著名な建築家A氏の建物はパリでも東京でも同じように見えるが、<みかんぐみ>の建築は場所の特色を利用してつくられる」と語る。例えば八代の集会所では、屋根と片側の外壁が折板で覆われ、一見、場所性と無縁のようだが、桑畑のある周囲の風景や前面道路との関係に配慮



マニュエル・タルディッツ氏

1959年生まれ。  
1984年ユニテ・ベタゴジークNO.1卒業。  
1985年文部省給費留学生として来日。  
1988年東京大学大学院修士課程修了。  
1992年セラヴィアソシエイツ設立。  
1995年NHK長野放送会館設計競技最優秀入選。みかんぐみ共同設立。現在に至る。  
筑波大学非常勤講師、ICSカレッジオブアート教授。

した壁面構成や材料の選択などに、場所性を意識した細かな配慮が感じられる。内部はがらんとした空間のようだが、空間の連続性に配慮しつつ時に応じて分割され、その構成は 伝統的な日本家屋を連想させる。

また、コンペ当選を機に組織を作り、オープンパートナーシップでの設計をめざすのが彼らのコラボレーションだ。「基本設計では、一人が複数案を持ち寄る。一案の場合、自分の案・他人の案とが勝負する印象になるからまずい。各自エスキース模型を含め案の特徴を説明し、各案を<フラット>に見る。良いところは取り入れ、悪いところは捨てる。これを何回か繰り返すうちに少しずつ自分の案・他人の案が入れ替わり、<誰かの案>の形が消えていく」…という。彼らは作家性というものにリアリティを感じず、このように平明な設計作法をとる。作家として个性的であるより、現実の複雑さを受容し、同時代的であろうとしている。現実が様々な問題を孕む時代の建築家の姿がそこに感じられた。(井出・大高)

## ■連載企画 広がるレースワーク 2

UIFA 国際女性建築家会議第 12 回日本大会のその後

### 日本とブラジルの文化のかけらを編み込む 1

ブラジル マリア・アンジェリカ・ダ・シルバ



国立アラゴア大学、都市建築学部教授。日本大会では、「ラグーナガーデンの緑化」と題し、環境共生の視点で、ブラジルの漁村の自然素材を使った建築について発表した。

A congress is an event that always evolves lots of expectation. To the possibility of exchanging ideas is added the excitement of doing a trip, sometimes for unusual places. That was the special case of the 12th Congress of the International Union of Women Architects, housed in Tokyo, for many of their participants including myself, coming from Brazil.

Japan and Brazil face the sun and the moon in total opposition. There is a popular Brazilian saying that affirms: if one digs a big hole in Brazil's territory, it will reach Japan. For me the Congress was a fantastic experience, conducting myself, for the first time, towards the oriental world. In my imagination, resurrected from oblivion the remembrance of the ancient Portuguese in their maritime expeditions during the 16th century. In 1500 they reached the South America and colonised Brazil. In 1543 they arrived in Japan. These were two different sorts of mirabilia, or marvellous lands. In Brazil, they found a stupendous nature and tribes that did not know about writing, law or faith. In Japan they reached an impressively high sophisticated culture. So, moving towards space, they also moved towards time. In Brazil they found the primitive, in Japan an ancient culture. That is important to say that the Portuguese also excited the Japanese curiosity.

The old Portuguese chronicles from that time mentioned the high degree of interest among the Japanese concerning foreign novelties as, for example, unknown artefacts as the harquebus, an early type of portable gun.

During the passage of the centuries the exchange between Japan and other parts of the world went on in a very particular way. In contemporary context, sometimes it is shaped in the cordial form of congresses. Special during the UIFA's meeting, I could find myself exchanging ideas and experiences in a very kind environment. It happened not only during the sections but also in the excursions, devoted to visit old towns or new environments. Suddenly I saw myself in front of ancient buildings erected by the use of techniques quite similar to ones I have been studied in my country.

I went back to Brazil carrying lots of personal and business cards, books and photographs. For years I provided myself with many resources to weave fragments of Japanese and Brazilian cultures. I am still very busy with the task of comparing the frail and perishable Brazilian fishermen settlements and the wooden framework of

Japanese buildings. I am still very interested in the way both cultures respond to the contests between globalization and tradition.

Most of all, I brought back with me the remembrance of a very particular way of organising a Congress, where I could find myself surprisingly "at home". In fact, the Congress itself was a chance to participate in a practical exercise of how to build harmonious relationships in direction to the 21st century.

会議はいつも沢山の期待を抱かせるイベント。意見を交換したり、なかなか行けない場所へ旅行する楽しみがある。UIFA 第 12 回日本大会は、ブラジルから参加した私を含め多くの参加者にとって特別なものだった。

日本とブラジルは、太陽と月という反対方向を向いている。「大きな穴を掘り続ければ、日本に着く」というブラジルの言葉があるくらいだ。東洋に初めて行った私にとって、日本大会は素晴らしい経験であり、それは、16 世紀のポルトガル人たちの航海を想起させた。彼らは 1500 年に南アメリカに到着しブラジルを植民地化し、1543 年に日本に来た。これらは 2 つの違う種類の素晴らしい土地だった。ブラジルには途方もない自然と文字や法や信仰を知らない人々があり、日本には非常に洗練された文化があった。彼らはブラジルでは原始的なものを、日本では古代の文化を見つけた。ここで重要なのは、ポルトガル人が日本人の好奇心の旺盛さに興奮したということだ。ポルトガルの当時の編年史をみると、日本人が外国の珍しいもの、例えば火縄銃のような未知のものに大変な興味を示したと書いてある。

この何世紀かの間に、日本と各国との交流は特別な方法で行われてきた。現代でいえば、国際会議の心の交流というかたちで行われることもある。私は UIFA 大会の間、論文発表の時ばかりでなく、新旧の街を訪ねたエクスカーションの時も、とても親切な雰囲気の中で意見を交換することができた。母国で学んできたものと非常に似通った技術で建てられた古い建物が突然眼前に現れたこともあった。私は、沢山の名刺や本や写真を持ってブラジルに帰った。私は日本とブラジルの文化のかけらを編み込むための資料を、何年も集めてきた。いま私はもろく壊れやすいブラジルの漁村と日本建築の木造架構を比較するという作業に追われている。そして両国の文化が、グローバリゼーションとトラディションの間の文脈にどう対応しているのかに興味がある。また、驚くほどくつろげた日本大会の特別な運営方法も印象深い。実際この大会自体が、21 世紀の調和のとれた関係への実践的な試みだったと思う。(訳 田中厚子)

## 関西国際交流セミナーを振りかえって 寺尾信子



寺尾三上建築設計事務所代表。日本大会では住宅・都市整備公団の「グループ分譲制度」の実例を通して、公的機関で実践されている日本のコーポラティブハウジングについて発表した。

早いものでUIFA日本大会から1年が過ぎた。昨年末、実行委員会解散会の折、刷り上がったばかりの報告書がメンバーに手渡され、歓声をあげながら皆で頁を繰ったことが懐しく思い出される。ちょうどその頃、(財)ユニオン造形文化財団「平成10年度国際交流助成」の完了届ほか書類一式が同財団に受理され、この助成に基づいてポストコングレスツアー中に神戸で開催された「関西国際交流セミナー」についてもしめ括りが行われた。報告書作成を担当した立場で、特に神戸のセミナーに参加できなかった方のために、セミナーのハイライト部分をご紹介したいと思う。

### 実施概要

日時：1998年9月11日(金)

場所：神戸市海洋博物館大ホール

テーマ：災害復興に向けた都市・建築の空間デザインを考える

参加国：20ヶ国 参加数：128名(海外91名、国内37名)

内容：ド・ラ・トゥール会長挨拶に続き、2つの講演  
講演1 まちづくり(株)コー・プラン代表 小林郁雄氏  
講演2 カリフォルニア州立大学ノースリッジ校教授  
ヴィクトリア・ファインバーグ博士

### 危険と安全は織りなされた二本の糸

まず、ファインバーグ博士は、阪神大震災と比較してノースリッジの地震に関して、カリフォルニア州立大学が学んだ教訓を語った。発生時はちょうど1年前の1994年1月17日。火災は発生したものの延焼は少なく、死者は神戸の約100分の1だった。災害時には強力なリーダーシップが最重要で、大学長ウィルソン氏が強力なリーダーシップを発揮した。彼女の「元どおりだけではない、前よりもっと良く！」というキャンペーンは、より良い未来へのビジョンを携え、地震後の暗い日々にあったキャンパスとその周辺地域を希望の方向に導いたという。

また、博士はアーロン・ウィルダブスキーの著書を用いて、危険と安全とは互いに織りなされた二つの糸で



左から小林郁雄氏とファインバーグ博士



会場は20ヶ国、128人の参加者でいっぱいになった

あり、「①物事がどのように起こるのか分らない未解明の部分、②物事が起こる環境の予想のつかない変化、③考えてもいなかった予想外の出来事からの影響、④技術及び社会の変化、それら4つのファクターを考慮に入れると、全てのリスクを予測することは基本的に不可能なこと、そのため、「起こるべき災害の危険性を正確に予測することが難しくなっており、戦略として、弾力的に立ち直る力を持つこと」が必要だと強く感じていると話した。

では、どのように対処すればよいかというと、「目に見えないリスクにどう対応するか」を常に考えてゆく必要があること。つまり、「どの程度我々はリスクを受け入れられるか。その許容量の中にリスクを抑える」ことを念頭に置き、「そのための予算や力はどの位必要なのか」という考え方に立たなければならない。言葉を代えると、どの程度危険が起きても良いのか、許容能力を判断するのが適切であろう、ということであった。

### 人を中心とした都市の考察

小林郁雄氏の講演では、これからの行動計画の5本柱に沿って、特にコミュニティの再生に力を入れていこうとする強い姿勢が伺われた。氏をはじめ関係者の努力により、震災を契機にして神戸の今後のコミュニティがどのように充実してゆくか、大きな期待が寄せられる内容の講演であった。

一方、ファインバーグ博士からは、完全な災害の予測は不可能だとすれば、それに対しどのように考えたらよいかについて、卓越した見解が披露された。

何れの講演もその根底には「ひとの暮らし」「人命の安全」など「ひと」を中心した都市の構想があり、都市を語る上で最も核心をついた内容であった。そして、「環境共生時代の人・建築・都市」というテーマを掲げたUIFA'98大会を締めくくるに相応しいセミナーであった。21世紀の住民本位の、また災害に強い都市を考える上で、参加者に大きな示唆を与えたものと思われる。

## 「風の道」計画のその後と名古屋のまちづくり

向井 愛



オフィス・アートパラダイス勤務。緑地や水辺の気候緩和機能に着目し、運河の「風の道」の働きを調査し、まちづくりに結びつけている。日本大会では「都市内運河の〈風の道〉としての働きとまちづくりへの提案」を発表。

昨年、UIFA 国際女性建築家会議で、都市内運河の「風の道」としての働きとまちづくりへの提案をパネル展示と共に発表させていただき、大変嬉しく思っています。

さて、都市の地形的特徴を活かし、自然の力を利用した「風の道」の暑熱環境緩和効果は、名古屋だけでなく多くの都市で確認されており、高い関心が寄せられています。この「風の道」を活かしたまちづくりをぜひとも実践していきたいと思っています。今回は、会議で報告した「風の道」のその後と、名古屋市におけるまちづくりへの取り組み、さらに私が手がけ始めた活動について報告したいと思います。



子ども達も参加した川遊び「まちたんけん・扇川コース」で

### 「風の道」を生かした水辺の都市構想

名古屋市における「風の道」に関する研究は、名古屋

工業大学堀越哲美教授の研究室の下で長年研究されてきたテーマであり、現在も続けられています。昨年の国際会議では、「風の道」を活かしたまちづくりの一例として、建物の配置計画に関する提案を行いました。実際に海風を都心部に導入するとなれば、このような都市計画的な要素が大きく影響します。そこで、「風の道」の考えを利用して、もっと多くの市民に河川や運河に目を向けてもらい、まちづくりへ積極的に参加して頂くことが必要でしょう。例えば、中川運河を名古屋駅から中部国際空港へのアプローチとして利用することや、運河沿いの倉庫をギャラリーやアトリエ、ワークショップの場として市民に開放することで、運河に背を向けていた生活を転換させることができます。

水辺のある都市は、生活のアメニティを高めると同時に過酷な夏の暑熱環境を改善していくことが可能となります。そこで、私はこれらの提案をまとめて名古屋市のまちづくりアイデアコンペに応募したところ、なんと優秀賞をいただきました。この提案は、名古屋市の第5次総合計画2010の策定において、住民からの意見として参考にされる予定です。



地域の子も達は川の生き物を探し、ウナギまで発見

一方、名古屋市では、河川を活かしたまちづくりへの本格的な第一歩として「なごや川プラン21」を発表しました。この中で都心部を流れる河川や運河、住宅地を流れる河川の親水性を高める必要性を論じています。河川法の改正なども手伝って、ようやく名古屋市でも河川を活かしたまちづくりが始まろうとしています。しかし、住民の声をどう反映させるかが明解ではありません。参加型まちづくりについても、他都市に比べると決して進んでいるとは言えない状況です。最近の藤前干潟の一件で、ゴミ行政の遅れを全国的に披露してしまった名古屋市ですが、これを機に参加型まちづくりを積極的に進める先進都市に生まれ変わることを信じています。

## 市民と共に「風の道」を活かしたまちづくり

私は最近、私の住む名古屋市緑区を流れる小河川で「風の道」を活かしたまちづくりに向けて活動を始めました。緑区には、扇川というかつて農業用水だった二級河川があり、東海道五十三次で知られる鳴海宿の傍を流れています。護岸は治水重視のよくあるコンクリート護岸ですが、護岸工事から10年以上が過ぎ、扇川は次第に自然の風景を取り戻しつつあります。現在は高い手すりでも水辺に近づくことはできませんが、今後安全面を考慮しながら、河原や水面を市民に開放し、親水性を高めていくことが望まれます。今年7月に区の生涯学習センターで行われた住民主催の発表会「みどりフォーラム」のなかで、「まちたんけん・扇川コース」という川遊びと発見のコースを開講し、地域の子どもたちに川の中の生き物や落とし物を探してもらいました。そこで昆虫・魚やカメなどの他、ウナギまで見つかるという楽しい発見もありました。今後は、活動をさらに広げていき、扇川を緑区に住む人にとって誇れる場所となるような川、区のシンボルとなるようにしたいと考えています。その中で地域の人々にも「風の道」のことを知ってもらい、一緒に「風の道」を活かしたまちづくりについて考えていきたいと思っています。

地域の人々にとってどんな川づくりがいいのか、またそこから住民自身がどうまちづくりに発展させていくか難しい課題ですが、やりがいも楽しみもあります。まちづくりを始め、まだまだわからないことがたくさんあります。今後UIFAの会員の皆様に良きアドバイスをぜひお願いしたいと思います。

## 共生する内装



栗山礼子建築デザイン事務所代表。文化女子大学講師。人に害を及ぼす建材や接着剤を安全なものに変え、環境共生の視点で住宅設計に取り組む。日本大会のテーマは「住宅の内装材を環境共生の視点で考える」。

私が住居の内装材に自然素材を使うことに固執するようになって10年が過ぎた。無垢の木や自然石、藤やココナツ類を敷き詰めたり、和紙や土を壁材として選ぶことは、同時に、住み手と作り手の住宅への基本姿勢を

を問うことでもあったと思わざるをえない。

## 使い捨てされる家

自然素材を使うことは、色・柄・厚みを同一に揃えてよしとする価値観との別離であり、施工の手間と日数を要し、すべて高くなってしまいう現実を施主が受け入れることができるかどうかにかかっている。材を探しだす側の私にしても、青森県の山奥で作っているというヒバ畳のカタログ1

枚を手に入れるのに、電話やファックスを入れ続けて2週間を費やし、そのあげくに「価格表は未作成で、購入決定時に交渉」などと聞くと、意欲を消失しそうになる。インターネットで他国の商品を瞬時に発注・決済できる時代に、どうしてこうも手間・暇がかかるのかと頭を抱えなくなる時もある。京壁もどきのビニールクロス貼りの和室に何の違和感も持たずに育った20代の夫婦が、赤ちゃんのアトピーに悩んで珪藻土の壁を決意したりする場合には、さらにメンテナンスの問題点も告げなくてはならない。メンテナンスフリーの新建材に慣れてしまった人は、住宅を快適に維持するには手入れが必要だというと驚くからである。

いつの頃からだろうか。家電製品と住居が同列の扱いをされていることに気づくようになった。冷蔵庫の耐久年数を15年と仮定すると、その15年の間ただの一度も掃除をしないで使い続ける人が存在する。このタイプの人は、家の手入れも同様にしない。まさかと思える高額商品？である家までも、無意識のうちに使い捨てにしているのだ。数百組の施主に恵まれ一組一組の生活をヒアリングするうちに、私はこれらのことに動じなくなった。私の事務所に内装デザイン料を支払ってでも、ある種の住宅を得たいという人は生活に窮してはいないはずだが、住体験が貧しいのだろうと推測している。

日本の風土や習慣になじむ暮らし方を提案したいと思いはじめたのは、住宅を使い捨てで感覚で考える人たちへのストッパーになる決意が固まった時からである。材料の一つひとつを説明し、正体を明かす。世話の仕方や性格



内装に自然材を使ったドイツのウルクハーン社の縫製工場。エコマネージャーが存在する。



ドイツ北西部ハノーファー郊外の共同住宅のゴミ箱。10世帯で可燃ゴミ用に60リットル容器が2つ。回収は月2回のみ。

を伝える。相手を知ることによって、人は愛着を育むはずだと信じ、その材料の長所・短所も隠さずにさらけ出す。できるならば施工時に施主も巻き込んでしまう。和紙を共に貼ったり、塗料を塗るのを一部手伝ってもらうこともあるが、作る作業に参加することによって、その後の手入れも覚えてもらえる良さがある。誰でも自分が作ったものは直せる自信がつく。環境との共生は、単純な方法だがこうして一步一步進めていくのが、一番確実だと最近では確信している。自分の家が他人任せでなくなって、やっと家のまわりの環境に配慮できるようになり、自分の住む街をいとおしむようになって、住環境全体への視野が広がるのではないだろうか。

#### 環境先進国ドイツを訪ねて

環境先進国のドイツ取材する仕事を得て、昨秋ドイツの家庭を何軒か訪ねた。ドイツでは、住む地域によって環境対策の温度差がある。環境都市の看板を掲げてソーラー団地や熱伝供給システムを採用し、発電しながら排熱を暖房や給湯に利用し、投入されたエネルギーを100%利用する町は各地からの見学者を迎えて、さらに住民の環境意識をたかめるという好循環に恵まれる。自治体職員、市民団体、環境団体、そして企業が独自の方法で環境対策に励んでいることは広く知られているが、個人の力の大きさに実は一番感銘を受けた。たった一人の人の発想が周囲の人々を動かして、車のない住宅地を実現させたり、ゴミのない小学校を運営している。

私自身も何か一歩踏み出したいとの思いで、日本に帰るなり車を廃車にした。自治体の不備を指摘するばかりで、自分の便利さにはしがみつきたかったことへの反省を含めて少し気分が軽くなっている。自然素材をすすめ、自転車をこいで現場に行く日々は、思いがけないほど快適である。共生の道と感性が一致する幸福感を少し覚え始めている。

## 「都市と農村との共生」—北海道版

中井和子



中井仁美建築研究所環境デザイン室長。日本大会では、「都市と農村の共生」をはかる都市近郊の農村景観に配慮した住宅地開発と集落環境整備計画をテーマに発表した。

東京生まれの私が、北海道に住んで約15年になります。日本の最北端に位置する北海道は、気候・風土や歴史・文化の違いはもちろん、生活様式や居住形態に至るまで、日本の他の地域とは大きく異なっています。そして、そのことがかえって、私の好奇心と探求心をたいへん刺激したように思います。現在私は、景観形成計画や住環境整備計画、環境デザインやまちづくりなどの分野に従事していますが、事務所全体では、個人住宅や集合住宅、医院や公共施設等の建築設計を含め、民間と公共の仕事を半々ぐらいの割合で行っています。



夕張太ふれあい館の内部

#### 一辺540m区画の北海道の農村景観

UIFA第12回日本大会では、「都市と農村との共生」のテーマで論文発表をしました。北海道の農村景観の特徴は、明治の「開拓」の歴史に起因し、一辺が540mグリッドの基盤目状の広い区画（「殖民区画」と呼ぶ）を等分割した耕作地とそれを囲む防風林です。計画の対象地域は、農業が基幹産業の南幌町夕張太地区と言う場所で、先の殖民区画を3等分した540m×180mの敷地です。農業従事者の住宅はもちろんのこと、さらに都市からの移住者の住宅も想定して、都市と農村の人々が自然体で交流できる住環境整備計画を考えました。地域の旧住民には、コミュニティ施設と公園計画で快適生活環境の形



UIFA JAPON 事務局

〒102-0083 東京都千代田区麹町2-6-5  
麹町E・C・Kビル (機生活構造研究所内)  
TEL03-5275-7861 FAX03-5275-7866

■この指とまれ

「風の道」まちづくりと藤前千瀧見学ツアーのお誘い

名古屋の向井愛さんから、「風の道」まちづくりと藤前千瀧見学ツアーのお誘いを頂きました。秋の1日、爽やかな「風の道」を訪ねる旅へご一緒しませんか？

日時：1999年11月20日(土)

午前10:30～午後5:00頃まで

集合場所：名古屋都市センター13階事務局ロビー

見学内容：名古屋市内のまちづくり

(町並み保存、川づくり他)、藤前千瀧

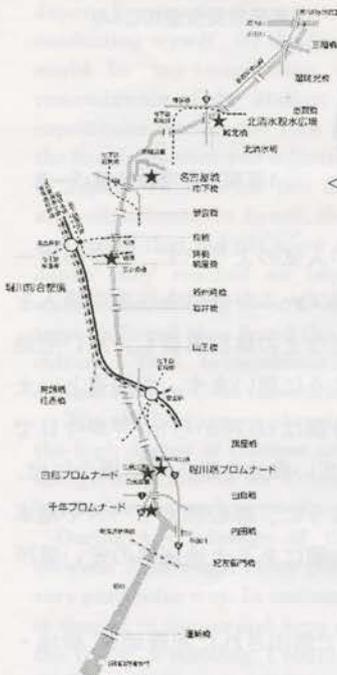
講師：堀越哲美さん(名古屋工業大学教授)

コーディネーター：向井 愛さん

当日は乗用車でご案内下さるとのことで、定員は10名。先着順です。希望者には詳細をお送りします。

申込み：須永 優子

事務所 TEL 03-3201-3901 FAX 03-3201-3890



<タイムスケジュール>

- 10:30  
名古屋都市センター集合  
市内まちづくり見学  
・白壁のまちづくり  
・堀川再生事業  
・名古屋港再開発など
- 13:00  
熱田蓬萊陣屋で昼食
- 14:00  
藤前千瀧へ移動
- 16:00  
ティータイム  
千瀧こつての演説
- 17:00  
解散  
希望者のみ二次会

■海外交流会

日時：10月30日(土) 午後2時～5時

テーマ：子どもと環境—各国事情

コーディネーター：小澤紀美子さん

パネリスト：長島キャサリンさん 岩村マグダレーダさん

\*詳細は追って事業部会からお知らせします

■セナさんの本を読む会

NEWS LETTER NO.33の「この指とまれ」の東さんの呼びかけで、3月27日から「セナさんの本を読む会」がスタートしました。「セナさんの本」とは、クロアチのセナ・セクリックさんから送られてきた一冊の本『A Search of Women in Architectural Theory and Practice』で、歴史における女性建築家の数々の文献をたどりながら紹介しています。原文はクロアチア語ですが英文版を読んでいます。

古代の女性建築家のすばらしい業績もさることながら、その背景となる壮大な古代西洋史の理解が必要で関連資料を収集しながら読み進めています。これまでに1章「アマゾネスの都市建築」、第2章「セミラミデの空中庭園」、第3章「ハトシェプストーエジプト第18王朝クレオパトラとシバの女王」まで読み進めました。また、先日は1泊2日で国立婦人教育会館で宿泊を行いました。セナさんからも大いに期待しているとのメールが届いています。月1回のペースで、土曜日の午後2時から5時まで集まっていますので、興味のある方はぜひご参加下さい。

連絡先：三上紀子

Eメール mn5336@ea.mbn.or.jp

〒113-0021 文京区本駒込4-39-2-1008

事務所 TEL/FAX 03-3828-5336

■役員会報告

第5回：8月18日(水)

出席者：中原 飯島 東 松川 山田 吉田(あ) 正宗 渡辺

・今年度の海外交流会について

第2回 10月30日(土) シンポジウム

「子どもと環境—各国事情」

千代田区の共催事業へ申込んだが、今回は採用されず。

第3回 遠藤薬氏のお話 日時未定

・藤前千瀧の見学について、詳細は左記。

・トルコの大地震について

寄付の提案があり、次回の海外交流会に募金箱を設置することに決定。

■広報日より

場所の特性を見極めようとするみかんぐみの設計手法は建築の基本だと再認識。遠いブラジルからマリアさんのメッセージ。そもそもネットワークからレースワークへという新語を UIFA 第12回日本大会宣言で創造したのもマリアさんの展示に触発されたこと。「風の道」「共生する内装」「都市と農村の共生」

もネットの間に暮らしを、場所を見る。トルコ地震！ 阪神淡路大震災もしかし。技術者のなすべき事は何か。大会から1年目の編集会議でグラシェラさんのアルゼンチンビデオ再観。セルフビルドもまた自立への共生、次回掲載予定。災害と技術者、貧困と技術者、課題多し。(編集長：渡辺喜代美)